

大鏡における希望表現について

柴田 昭二
連 仲 友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、大鏡を研究資料として、それにおける希望表現^②の実態を説明しようとするものである。

『日本古典文学大辞典』^③によると、大鏡は「栄花物語」と同様に、藤原道長の栄華を中心にした歴史物語と位置づけることができる。「栄花物語」がいわば女性のための歴史書であるのに対して、異なる視点から見たものといえる。作者は、藤原氏出身者と源氏出身者から十数名の名があげられているが、現在のところ未詳とするべきであろう。成立時期も同様に、文中の「今年、元永二年己の亥とや申す」という記述を素直に読めば元永二(一一一九)年になるが、万寿二(一一二五)年説の他に、その間の成立説が多数存在する。高齢の男性二人、一九〇歳の大宅

世継と一八〇歳の夏山繁樹に若侍が加わり、問答体座談型で昔物語が立体的に進められ、一人の記録者の手によりその対話が記録されるという趣向で作られている。昔の記憶を語るといふ会話の文章が和文体で叙述されている。

テキストには、橘健二、加藤静子校注『大鏡』(小学館 新編日本古典文学全集34 一九九六年六月第一版第一刷発行)を用いる。凡例によると、その底本は京都大学附属図書館蔵の旧近衛本であり、本文作成において、歴史的仮名遣いに統一し、送り仮名を補った。そして、底本の古体・異体・略体の漢字は、通行の漢字を基準として改め、適宜、漢字に仮名を、仮名に漢字を当てた。さらに読みにくい漢字には歴史的仮名遣いによって振り仮名をつけた。底本にはない句読点・段落をつけ、会話体の場合は「」で括った。

二、希望表現の構成形式

大鏡(以下、「本書」と略す)における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。

「ムト思フ」 (三七例)

「ムトス」 (二例)

「願」 (四例)

「願ズ」 (二例)

「望ム」 (二例)

「祈ル」 (一六例)

「請フ」 (二例)

「乞フ」 (二例)

「求ム」 (八例)

「ホシ」 (四例)

「マホシ」 (二一例)

「バヤ」 (七例)

「ガナ」 (四例)

「ナム」 (四例)

右から見られるように、本書における希望表現の構成形式には、慣用形式の「ムト思フ」「ムトス」、名詞用法の「願」とサ変動詞用法の「願ズ」、動詞「望ム」「祈ル」「請フ」「乞フ」「求ム」、形容詞「ホシ」、助動詞「マホシ」、終助詞「バヤ」「ガナ」「ナム」が見られ、いずれも和文体の表現形式が多数である。また、名詞の「欲」と慣用形式の「願クハ」が見られないことも特徴的である。

三、各形式の用法

1、「ムト思フ」「ムトス」の用法

まず、「ムト思フ」の用法を見る。本書に「ムト思フ」は三七例見られる。その中で、日本語本来の「意志」の用例が多く、希望表現は数

例のみである。

(1) 年経ぬる竹のよはひを返してもこの世をながくなさむとぞ思ふ (二〇一頁)

例(1)は和歌における用例であり、「あなたの齢を長くしたいと思う。」の意と解され、これは「願望⁽⁴⁾」を「表出⁽⁵⁾」する用法である。

(2) 「また、大小のことも申し合はせむと思つたまふれば、無礼をもえはばからず、かくらうがはしき方に案内申しつるなり」 (二八五頁)

(3) 「さはありと、聞かむと思し召さば、すこぶる申しはべらむ。」 (四三三頁)

例(2)は、「また、様々な事をもご相談申し上げたいと存じますので」の意と解され、これは従属節で「願望」を「説明⁽⁶⁾」する用法である。例(3)は、「どのようなことがあったのか、お聞きになりたいとお思いましたら、」の意と解され、仮定形で「願望」を「説明」する用法である。

次に、「ムトス」の用法を見る。「ムトス」はもともと「将然」を表すのが基本であるが、そのうちいわゆる有情物の「将然」は希望表現と関連性が強い。本書にこのような希望表現と関連する「ムトス」は二例認められる。

(4) 「我はしかじかのことのありしかば、そこに建てむずるぞ」と申させたまひける。(三五二頁)

(5) 居所みどころも尋ねさせむとしはべりしかども、ひとりびとりをだに、え見つけずなりにしよ。(四二〇頁)

例(4)は、「私は、以前のことがあったから、そこに建てたいと思うのだ。」の意、例(5)は、「老人たちの居所をもつきとめさせようとしたけれども、」の意と解され、いずれも希望表現と関連性がある用法である。

2、「願」「願ズ」の用法

まず、名詞「願」の用法を見る。本書に名詞の「願」は四例見られ、すべて仏教用語である。

(6) 御法事ほほじの願文くわんもんには、「釈迦しよか如来にょらいの一年ひととせの兄このかみ」とは作られたるなり。(二七頁)

(7) 位につかせたまひて、将門まさかどが乱れ出でて、御願ごがんにてぞと聞こえはべりし、この臨時の祭は。(三八頁)

(8) 父殿、女子をほしがり、願くわんをたてたまうしかど、御顔ごかほをだに見たてまつりたまはずなりにき。(二九〇頁)

例(6)は、「天皇のご法事の願文に、」の意、例(7)は、「平将門の乱の調伏のご祈願によって、この臨時の祭が始まったのだとうけたまわりました。」の意、例(8)は、「御父が姫君を欲しがって、神仏に願をお立てになりましたが、」の意と解され、これらの「願文」「御願」「願」はいずれも仏教用語であり、神仏に祈り、願うことを表す名詞用法である。

次に、「願ズ」の用法を見る。本書に「願ズ」は二例見られる。

(9) かるが故ゆゑに、この無量寿院も、思ふに、思おぼし召めし願くわんずることはべりけむ。(三四九頁)

(10) 「これ求め出でたらむ所には一伽藍を建てむ」と、願くわんじ思しして、(三五〇頁)

例(9)は、「この無量寿院も、入道殿のご心中に何か祈願なさることがあつて造営されたものでしょう。」の意、例(10)は、「この琴の爪を捜し出した所には、一伽藍を立てようと、願をお立てになって、」の意と解され、いずれも仏教用語であり、神仏に祈願する意を表す実動詞用法である。

3、「望ム」「祈ル」「請フ」「乞フ」「求ム」の用法

まず、「望ム」の用法を見る。本書に「望ム」は二例あり、いずれも実動詞用法である。

(11) 「この度たびの中納言望のぞみ申したまふな。ここに申しはべるべきなり」と聞こえたまひければ、(二二八頁)

(12) 「されば、ものの心知りたらむ人は、望のぞみてもまゐるべきなり。」(三五四頁)

例(11)は、「今度は中納言を所望なされないように。」の意、例(12)は、

「ものの道理が分かる人は自分から志願しても参加するべきです。」の意と解され、いずれも動作行為を表す実動詞用法である。

次に、「祈ル」の用法を見る。本書に「祈ル」は一六例あり、そのうち実動詞用法が五例、連用形名詞法が一一例見られ、熟語用法は見られない。

(13) かく知らましかば、君達をこそ、我より先にうせたまひねと、祈り思ふべかりけれ。(二二六八頁)

(14) それにより、かの寺に藤氏を祈り申すに、(三四三頁)

例(13)は、「あなた方が、私より先に亡くなってしまいなさいと、祈念すべきでした。」の意、例(14)は、「それでその山階寺で藤原氏のご祈祷をいたすのですが、」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

(15) 淨藏定額を御祈の師にておはす。(六七頁)

(16) 功德も御祈も如法に行はせたまひし。(一一〇頁)

例(15)は、「縁のある淨藏定額をご祈祷僧としていらっしやいました。」の意、例(16)は、「功德をお積みになるにも御祈祷の折にも、法式どおりに行いました。」の意と解され、いずれも連用形名詞法である。

次に、「請フ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「請フ」は一例見られる。

(17) 瓜を請はば、器物をまうけよと申すこと、まことにあることなり。(二九五頁)

例(17)は、「瓜を求めるのなら、まずその入れ物を用意しなさいという諺があるが、」の意と解され、実動詞用法である。

次に「乞フ」の用法を見る。本書に「乞フ」は二例見られる。

(18) 僧都は乞食とどめたまひてき。(二二二頁)

(19) 昔は、殿ばら・宮ばらの馬飼・牛飼、なにの御霊会、祭の料とて、銭・紙・米など乞ひのしりて、野山の草をだにやは刈らせし。(三五三頁)

例(18)は、「僧都は托鉢をおやめになりました。」の意と解され、「乞食」は仏教用語で名詞用法である。例(19)は、「銭や紙や米などを大騒ぎして求めて、」の意と解され、実動詞用法である。

次に、「求ム」の用法を見る。本書に「求ム」は八例あり、そのうち実動詞用法が七例、熟語形式が一例見られる。

(20) 幼くおはします君にしも、「求めてまゐれ」と仰せられければ、(三五〇頁)

(21) もしこのことどもの術なからむ時は、紙三枚をぞ求むべき。(三五五頁)

(三五五頁)

例(20)は、「琴の爪を捜してきなさいと御命じになりましたので、」の意、例(21)は、「申文を書くのに必要な紙三枚を手に入れなさい。」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

(22) 御車の前近く立ちとどまりて、求子を袖の気色ばかりつかまつりたまひて、(三九八頁)

例(22)は、「求子の舞を、袖振るらしく演技なされて、」の意と解され、「求子」は舞の題であり、固有名詞としての熟語形式用法である。

4、「ホシ」「マホシ」「バヤ」「ガナ」「ナム」の用法

まず、形容詞「ホシ」の用法を見る。本書に「ホシ」は四例あり、そのうち一例は「ほしがる」の形である。

(23) 「先祖の御ものは何もほしけれど、小一条のみなむ要にはべらぬ。」

(九五頁)

(24) わがすることを人間にほめ崇むるだに興あることにてこそあれ、まして神の御心にさまでほしく思しけむこそ、いかに御心おごりしたまひけむ。(一〇〇頁)

例(23)は、「先祖のお持ちになった物はなんでも欲しいけれど、小一条の邸だけは欲しくは思わない。」の意、例(24)は、「まして神のお心に、それほどまでにお願いなされたということは、「の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(25) 父殿、女子をほしがり、願をたてたまうしかど、御顔をだにえ見

たてまつりたまはずなりにき。(二九〇頁)

例(25)は、「道兼殿は姫君を欲しくお思いになり、神仏に願をお立てになりましたが、「の意と解され、これは「ほし」に接尾語「がり」が付いた、第三者の希望を表す動詞用法である。

次に、助動詞「マホシ」の用法を見る。本書に「マホシ」は二一例あり、そのうち地の文に七例、会話文に一三例、和歌に一例見られる。また、二一例のうち慣用的な「あらまほし」は三例見られる。

(26) 「なほ、わ翁のとしこそ聞かまほしけれ。」(二七頁)

(27) 「いみじう見たまへ聞きおきつることは、申さまほしう。」

(一八一頁)

例(26)は、「ぜひとも、ご老人の年齢をうかがいたいものです。」の意、例(27)は、「すばらしいと見たり聞いたりしたことは、お話ししたいものです。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

(28) 「ここにあり」とて、さし出でまほしかりしか。(三六六頁)

(29) 「またも聞かまほしかりしかども、さもなくてやみにしこそ、今に口惜しくおぼゆれ」とこそたまふなれ。(三九四頁)

例(28)は、連用形で用いられ、「私はここにいますよ」と言って、飛び出したことでした。「もう一度聞きたかったけれども、」の意と解され、過去の「願望」を「説明」する用法である。

(30) ゆきやらで山路くらしつほどときすいま一声の聞かまほしさに

(一三三二頁)

(31) 何事よりも、かの夢の聞かまほしさに、居所も尋ねさせむとしは
べりしかども、(四二〇頁)

例(30) (31)は、接尾語「さ」が付いた名詞形で用いられ、「ほととぎすのすばらしいもう一声が聞きたくて」、「あの夢のことがもつと詳しく聞きたくて」、「の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(32) 院号たまひて、年に受領などありてあらまほしきを、いかなるべきことにかと、伝へ聞こえられよと仰せられければ、

(一三三三頁)

(33) 常よりも乱れ遊ばせたまけるさまなど、あらまほしくおはしけり。
(二七四頁)

例(32) (33)は、「あらまほし」の形で用いられ、「院号をいただき、年官年爵に受領給を受け取って気楽に過ごしたいのですが」、「いつもより興を尽された様子など、好ましいご態度でいらっしやいました。」の意と解され、「あらまほし」は「理想的な取り扱い」「好ましい状態」を表す一種の慣用的用法であり、「願望」を「説明」する用法である。

次に、「バヤ」の用法を見る。本書に「バヤ」は七例あり、そのうち会話文に六例、心話文に一例見られる。

(34) 「伝はりぬることは、いでいでうけたまはらばや。」(一二七頁)

(35) 「綿を一つに入れなして一つばかりを着たらばや。しかせよ」と仰せられければ、(三〇四頁)

例(34)は、「伝わってきた話はぜひぜひお聞きしたい。」の意、例(35)は、「綿をまとめて一つの袖に入れ、一枚だけを着ていたいものだ。」の意と解され、いずれも文末の言い切りの形で「願望」を「表出」する用法である。

(36) 「このただ今の入道殿下の御有様をも申しあはせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひ申したるかな。」(一三三頁)

例(36)は、「このただ今のご様子をもお話し合いたいたいと思っていたところ、うれしくもお会いましたことですよ。」の意と解され、これは従属節で「願望」を「説明」する用法である。

次に、「ガナ」の用法を見る。本書に「ガナ」は四例あり、そのうち「ガナ」は一例、「ヲガナ」は一例、「テシガナ」は一例、「ニシガナ」は一例見られる。

(37) 「母が抱きて、『この兎買はん人がな』とひとりごちしを聞きて、」
(一七頁)

(38) さまざま、金・銀など心を尽くして、いかなることをがなと、風流をし出でて、持てまゐりあひたるに、(一八九頁)

例(37)は、「『この子を買おうと思う人がいてほしい』と独り言を言ったのを私が聞いて、」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。例(38)は、「金・銀などで工夫を凝らし、なんとかしてお気に召すような物をさしあげたいと願って、意匠を凝らした物をこしらえ、それぞれ持って参りました中で、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(39)「ほかの月をも見てしがな」などは、この御堂ありさまに思おほし召めしよけめることとおぼえず、心ぐるしうこそさぶらへ。(二〇〇頁)

(40)ゆく末すまに、この御堂くさきの草木くさきとなりにしがなしとこそ思おほひはべれ。(三五四頁)

例(39)は、「他の地での月も見てみたい。」の意、例(40)は、「死後にはこの御堂の草木となりたいと思います。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「ナム」の用法を見る。本書に「ナム」は四例あり、全て和歌に用いられている。

(41)業平なりむら中将のちやうの「よひよひごとごとにうちも寝ななむなむ」とよみたまひけるは、この宮の御ことなり。(二四頁)

(42)小倉山せくらやま紅葉もみぢの色も心あらばいまひとたびのみゆき待たなむなむ (三七七頁)

例(41)は、「関守は寝てしまっしてほしい。」の意、例(42)は、「盛りの

色そのまま次の行幸まで待っていてほしい。」の意と解され、いずれも「希求」⁷⁾を「表出」する用法である。

四、おわりに

以上、大鏡における希望表現の構成と用法を考察してきた。その希望表現の構成形式の種類を見ると、助動詞「マホシ」と終助詞「バヤ」「ガナ」「ナム」が希望表現の中心をなしていることが特徴的で、これは大鏡の文体と関連する現象と言えよう。

各構成形式の用法については、慣用形式「ムト思フ」は用例が多いが、希望表現を表す用例はさほど多くない。本来の、内心の意志を表す用例が多い。名詞「願」とサ変動詞「願ズ」は全て仏教用語として用いられ、希望表現の周辺的な存在である動詞「望ム」「祈ル」「請フ」「乞フ」「求ム」では「祈ル」が量的に多く、用法にも実動詞用法以外に動詞連用形名詞法が見られるが、他の動詞は用例数も少なく、用法も動作行為を表す実動詞用法のみである。

本書においては、和文体特有の助動詞と終助詞が希望表現の中核である。そのうち「マホシ」「バヤ」「ガナ」で「願望」を、「ナム」で「希求」を表す。また、本書の構成は対話形式であることにより、希望を直接「表出」する用法が多いのが特徴である。

【注】

(1)柴田昭二、連仲友「希望表現の通史的序説」『香川大学教育学部研究報告 第一部第109号』平成12年3月

(2)ここでのいう希望表現とは、人の願望望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の

問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「二人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大辞典』第一巻 一九八三年一〇月第一刷発行 岩波書店

(4) 注(2) 参照。

(5) 注(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

(7) 注(2) 参照。

【前稿の補遺】

柴田昭二・連 仲友「栄花物語における希望表現について」(『香川大学教育学部研究報告 第三号』二〇二〇・九)において、「タシ」の用例を見落としていた。追加していただければ幸いである。

・3ページ 2. 希望表現の構成形式に

「タシ」 (一例)

・7ページ 4. 「ホシ」「マホシ」「バヤ」「ナン」「タシ」

・10ページ 下段17行目の次行に

「タシ」の用例は1例のみである。

(73) 御文あり、「今朝はなごやがて寝暮し起きずし起きては寝たく暮る、まを待つ」とあり。(巻第十四 上四二四頁)

例(73)は返り事の和歌であり、「今朝はなぜそのまま寝暮らして起きなく、また起きたら早く寝たくなり夕暮を待ち望むのだろうか。」の意と解され、願望を説明する用法である。「タシ」の比較的初期の用例として重要である。

・11ページ 上段10行目に

和文系の「マホシ」「バヤ」「ガナ」「タシ」は、

(しばたしように)

(れんちゅうゆう)

香川大学名誉教授
広島市立大学客員研究員

(二〇二〇年一月三〇日受理)